

石垣原合戦に出陣した

野津原郷士と永富家三兄弟

矢島嗣久

生野 内膳

大龍は大分川右岸の河岸段丘上にあり、西部で阿蘇野川、東部で芹川が大分川に合流する。

平野村居住（現大分郡野津原町北東部）

橋山新大夫

野津原居住軍鑑

小野九右衛門

筒口村居住（現大分郡挾間町谷村筒口）

守田太郎右衛門

谷村の西部にあり、その西側は龍原村（現庄内町）。

江戸時代を通じて肥後熊本藩領である。

平野村居住（現大分郡野津原町北東部）

小野 藤太

恵良村居住（現大分郡野津原町北東部）

斎藤一徹斎

祇園馬場居住

森 嘉川

市場南側居住（現大分郡野津原町本町）

葛城仁左衛門

同所北側居住

安部家文書中に野津原手永（惣庄屋）から出陣した武士と、戦死した武士の氏名がみられる。これは、石垣原合戦の翌慶長六年（一六〇一）、野津原が肥後領になって、加藤清正の命で報告したものの写しのものである。また、植田莊高瀬（現大分市高瀬）の永富氏三兄弟は野津原に逆修墓を建立して、石垣原合戦に出陣した。

一 石垣原合戦に出陣した野津原郷勇士の生存者氏名

慶長五年（一六〇〇）石垣原合戦出陣の野津原郷勇士

の氏名着到順

谷村居住（現大分郡挾間町谷村）

清田新五衛門

恵良村居住（現大分郡野津原町北東部）

広瀬一徹斎

大龍村居住（現大分郡庄内町大龍）

小野 大和

同所 居住

佐藤 兵庫

原野居住

橋本太郎右衛門

市場筋居住

小野 大学

市場筋居住

久多良木市弥太

太田村居住（現大分郡野津原町中央北部）

小井手十郎

市場筋居住

永富 伝助

畑ヶ瀬居住

河野 豫学

筒口村居住（現大分郡挾間町谷筒口）

井上三五郎

野津原吉祥庵居住（現大分郡野津原町太田）

仲元寺入道光実

寺坂居住

熊谷 武蔵

原村居住（現大分郡野津原町中央原村地区）

那須 和泉

五ヶ瀬居住（現大分郡庄内町大字東庄内五ヶ瀬）

小原彦兵衛

五ヶ瀬は芹川左岸の河岸段丘上にあり、西は大龍村。

江戸時代を通じて肥後熊本藩領。

野津原居住

大宅 隼人

廻栖居住（現大分郡野津原町北東部）

加藤熊右衛門

太田阿闍梨庵（現大分郡野津原町太田）

小出 重郎

矢ノ原居住（現大分郡野津原町中央部）

甲斐貫太夫

柿野居住（現大分郡野津原町野津原）

安東重右衛門

竹ノ内居住（現大分郡野津原町）

佐藤治左衛門

野津原居住

衣笠助九郎

廻栖居住（現大分郡野津原町北東部、廻栖野、廻栖）

田吹重兵衛

恵良村の東にある。

山鶴居住（現大分郡庄内町、旧大竜村、三段田）

田中 小六

野津原居住

石井又左衛門

野津原居住

池辺武右衛門

田小野^{たのおの}居住（現大分郡挾間町谷鬼崎田小野、大分市

鬼崎）

指原^{さしはら} 伯知

田野小野村は大分川左岸に位置し、西は谷村、東は

横瀬村（現大分市）。江戸時代を通じて肥後熊本藩領

である。

栗灰居住（現大分郡野津原町北西部）

森永 駿河

市場筋居住

飯倉伊兵衛

矢ノ原居住

菊池 十郎

胡麻鶴^{こまづる}居住（現大分市西部、野津原町との境）

胡麻鶴新助

谷村同尻向居住（現大分郡挾間町谷同尻）

佐藤 四郎

湛水^{たまりみず}村居住（現大分郡野津原町中央西部上話）

山上 兵衛

日東^{ひらがし}居住（現大分郡野津原町字野津原又は字入蔵、野

津原町北東部）

木ノ内五郎右衛門

右は野津原郷士、石垣原戦死ならびに蟄居^{ちつきよ}取調届け出

づべきむね、御達しの趣き承知たてまつれば、露夢廟庵

鎮守、かつ蟄居の浪士前書の通りに御座候以上

慶長六年六月六日 軍鑑安部和泉父

隠居入道安部了端

加藤清正殿

以上、石垣原合戦に参戦して生存している郷士の数は

四十二名である。

広辞苑によれば、「手永」とは、肥後藩・小倉藩などの地方行政区画。各手永には惣庄屋（肥後藩）・大庄屋（小倉藩）などの土分の役人が置かれ、民政をつかさどった。

軍鑑とは、軍事の監督、「いくさめつけ」のことをいう。

二 石垣原合戦に参戦した野津原郷士の戦死者氏名

野津原郷士住居前後石垣原戦死者諡号から抜粋（安部影明文書、諡号名は省略、筆者）

植田多門之助貞世

佐藤治部太夫信隆（繁美城城主〔現野津原町太田、中

央北部〕の末裔？）

御館刀根次郎吉任

広瀬一学惟住

工藤帯刀経義

安部掃部之助良任

石合丹後惟清（石合は大分郡野津原町西南部、今市付

近）

加藤相模正康

佐藤次（治？）部太夫豊成

波多野一徹康隆

斎藤三郎光明

斎藤左（右？）近原基

雄城上総有明

佐藤三郎太夫信俊

佐藤次郎兵衛忠貞

三ヶ尻丹後住友

志賀掃部道則

立川長門行則

赤星弾正義貞（現大分郡野津原町原村）

奈須氏「本家口伝書」戦死者名より

雨川左馬之助（現大分郡野津原町原村の北西方雨川村）

以上戦死者数は二十名である。従って六十二名の郷士が石垣原合戦に参加したことになる。

三 永富氏三兄弟の逆修墓

豊後の大友氏の旧臣たちは、大友氏改易後は豊後各地

に散在して、帰農したり、他家に仕官したりしていた。

慶長五年（一六〇〇）九月、大友義統は安芸（現広島県西部）の大畠に下り、そこで西軍の毛利輝元（毛利元就の孫）から兵船と鉄砲隊百人を与えられて豊後に帰国した。大畠は山口県南東部、玖珂郡にある町。

この頃、旧臣たちは大友氏再興の旗揚げが近づいたことを伝えられていた。

このことを物語る史料として、野津原の町はずれ（現野津原本町）の永富家墓地にある永富氏の逆修墓三基がある。墓の場所は野津原町大字野津原字本町、国道四四二号線北側高台の墓地にある。逆修墓とは生前に、死後の冥福を祈って建てる生前供養墓のことをいう。

永富氏はもともとは、植田荘高瀬村（現大分市高瀬）付近を本領とする大友氏の旧臣であった。

「永富氏略系」によれば大友氏二代親秀の子重秀（戸次次郎左衛門尉）から三代目が能親（大富伊予守）、九代目が国光（永富大和守）、四代目が鑑次（永富六郎）その子が鑑国（与右衛門）、鑑俊（九郎）、統継（源十郎）の三兄弟である。

「郷土史野津原」と「原村小史」では永富氏となっているが、永富 忠氏著の「豊後永富家物語」では永富氏と字冠に点のない「富」の字が用いられている。

高瀬は大分市の南西部、七瀬川右岸にあり、霊山標高、五九六メートル）の北麓に位置している。現在、高瀬地区の北方には隣接して七瀬川自然公園が新設された。高瀬の中央部には高瀬石仏があり、付近には七、八軒の永富家がある。高瀬の東方には田尻グリーンハイツ、南には岡川、西方には口戸に隣接している。

高瀬の南側、岡川秋岡の常楽寺の前を東に向かって約二百メートル進むと、大友氏第三代頼泰の墓（五輪塔）が北側左手にある。

大友頼泰は執権北条時宗（鎌倉幕府第八代執権）の時代のとき、蒙古が二度来襲し（文永の役、文永十一年、一二七四。弘安の役、弘安四年、一二八一）、少弐経資とともに九州の御家人を指揮して防御にあたった。大友氏は第三代頼泰のとき豊後に定着したと言われている。

弘安八年（一二八五）大友第三代頼泰が、鎌倉幕府に注進した「豊後国図田帳」に、豊後荘園の名に植田荘永富名、（三十七町一反三百十二歩、三十六・七アール）

と記されている。

大分市岡川秋岡の臨濟宗妙心寺派常楽寺は、正安二年（二三〇〇）大友頼泰の創建と伝えられる。現在、大友氏家臣の子孫にあたる永富氏が住職をされている。

当時、高瀬の永富氏は主家再興の旗揚げが近づいたとの連絡をうけた。慶長五年（一六〇〇）の七月に、一族（兄弟）三人の逆修墓をひそかに野津原の町はずれに建立した。

なぜ、高瀬（現大分市）の永富氏が野津原に来て逆修墓を建立したのか、その点があきらかでないが、あるいは一族の誰かが野津原に住んでいたのであろう。石垣原合戦に参陣した市場筋居住で、永富伝助という記録（前掲）がある。

この逆修墓の建立年月は「千時慶長五年庚子七月吉日」と刻まれている。これは石垣原合戦の約二カ月前である。「郷土史野津原」には、永富氏の逆修墓に関して、高瀬の永富家の記録として次のように記してある。

「三人の兄弟があったが、ともに石垣原に出陣した。しかし（九月十二日の決戦を前にして）、長男の永富刑部少輔源十郎鑑国に対して、弟の与右衛門尉鑑俊と、九

郎統継の二人が、永富家のために生きながらえてほしい旨を頼み、戦線を離脱させた。弟二人は戦死したが、長男源十郎によって永富家が今日まで続くことになった」という。

「豊後永富家物語」永富 忠著の「永富氏略系」によれば、永富（六郎）鑑次の長男が刑部少輔統継（源十郎）、弟が鑑国（与右衛門）、鑑俊（九郎）の二人と記されている。

「郷土史野津原」と「豊後永富家物語」では三兄弟の諱は、長男源十郎は鑑国、統継、次男は与右衛門鑑俊、鑑国、三男は九郎統継、鑑俊のように混乱している。

三兄弟の父永富刑部少輔鑑次が書いた文書によれば（抜粋）、

天正十一年（一五八三）、秀吉公が大坂城へ移るときに、大友公が命に従い大阪へ向かう際、義統公より短刀と併せて統の一字を頂き永富与作統次と改名した。

文禄元年（一五九二）正月、太閤秀吉の朝鮮征伐につき、大友義統公より朝鮮渡海の御供を申しつけられ、永富与右衛門、同九郎が渡海する。

石垣原合戦のさい細川勢、松井佐渡守、黒田如水勢、森（母里）太兵衛の軍勢三千余騎、大友勢の侍七十二騎、雑兵百五十三人が討ち死にする。敵方（黒田方）三百八十人討ち取る。

永富与右衛門、同名九郎は討死す。刑部少輔源十郎は残り、後には農人となる。

慶長五年十一月

永富刑部少輔 鑑次 書之

四 加藤清正と石垣原合戦

豊臣秀吉は文禄二年（一五九三）の五月に、大友吉統（義統）から豊後を没収すると、豊後国全域は太閤蔵入地とされて、直ちに豊後の検地（文禄検地）を実施した。検地奉行には、加賀国大聖寺城主の山口玄蕃頭宗永（正弘）と、因幡国鳥取城主の宮部善祥坊法印繼潤が任命された。宮部善祥坊は国東、速見、日田、玖珠の北部四郡を、山口玄蕃頭は大分、海部、大野、直入の豊後南半分を検地した。

秀吉は検地を行ったあと、豊後を七人の大名に恩賞と

して分けて与えた。

この結果、野津原町の地域は早川長敏の府内藩六万石に含まれることになる。

慶長二年（一五九七）には領主が福原直高に替り、府内藩十二万石になった。

このように、大友氏の改易から、太閤蔵入地（直轄領）、そして太閤検地の実施、さらに早川氏の府内領、福原氏の府内領へと、めまぐるしい政治変動期が続いた。

そして、慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の役があり、その結果、野津原の地域は加藤清正の肥後領になったのである。

県道別府一の宮線の「別府ロープウェイ」バス停と「鳥居」バス停との中間地点で、県道左手南側の高台上（標高約五百三十メートル）に肥後熊本城主加藤清正の小さな石像が見える。この石像は昭和二十七年（一九五二）頃に建立された。これは、石垣原の合戦に東軍徳川家康方の黒田如水孝高を助けて、西軍石田三成方に組みした大友義統（吉統）を討ち滅ぼそうと、加藤清正軍の先手がこの付近までやってきて軍旗を立てたが、戦いはすでに終わり、大友義統は黒田如水に降伏してしまっ

いた。そのため、この付近を「旗の台」という。

『大分県史 中世篇』によれば、慶長五年の九月十四日に内牧（阿蘇町）で宿陣した清正は、翌日肥後小国から引き返したという。

野津原が肥後領になったのは、慶長六年（一六〇一）の二月である（「熊本藩年表稿」）。

これは肥後熊本城主だった加藤清正が、前年の関ヶ原役後、その恩賞として徳川家康から小西行長の旧領（肥後国の南半分）を宛がわれ、肥後一国の大名となった。しかし、清正は天草郡（島原）の領有を辞退して、その替地として豊後国内の海部・大分・直入三郡（佐賀関、大在、鶴崎、野津原、久住）のうち二万石の飛び地領を宛がわれることになる。（「熊本県の歴史」）。

加藤清正は鶴崎（現大分市鶴崎）を瀬戸内に向けての海の玄関口とし、肥後と鶴崎を結ぶ道筋の大分郡に野津原を希望し、さらに直入郡の久住を希望した。

ここに肥後領野津原が成立したのである。

熊本藩主加藤氏は清正の跡を継いだ忠広（清正の子）

が寛永九年（一六三二）に改易された。そしてその後かえきに小倉城主細川忠利（忠興の嫡子）が入部し、肥後五十四

万石を領するとともに豊後領二万石もそのまま細川氏が支配した。

最後になりましたが、記事取材や参考資料等にご協力いただきました大分市長浜町在住の黒木正道氏、別府市大畑在住の川田 康氏、野津原町在住の縣 燐子様へ、紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。

引用参考資料

「郷土史 野津原」 昭和五十五年

野津原町

「原村小史」 平成五年四月

野津原町原村郷土史調査研究会

「豊後永富家物語」 昭和四十七年六月

永富 忠

「大分県の地名」 一九九五年二月

株式会社 平凡社



加藤清正石像



永富氏逆修墓



永富氏逆修墓表示板

石垣原合戦年表

建久七年（一一九六）

このころ、大友氏初代能直、豊後守護・鎮西一方奉行として豊後に入国するという説あり。実際には入国しなかったようである。

文永九年（一二七二）

蒙古襲来につき九州の御家人下向、異国防御につく。大友氏三代頼泰も下向した模様。

文永十一年（一二七四）十月二十日、蒙古襲来（文

永の役）。大友頼泰、豊後御家人をひきい筑前博多で戦う。

弘安四年（一二八一）

六月六日、蒙古再来（弘安の役）。

永祿元年（一五五八）

閏六月十八日、大友義統が、大友氏二十一代義鎮、宗麟の嫡子として豊後国、府内（現大分市）に生まれる。

天正元年（一五七三）

十二月、宗麟は家督を嫡子義統（二十二代）十六歳

に譲る。

宗麟四十四歳。

天正六年（一五七八）

十一月、豊後大友軍が日向高城、耳川にて島津軍と戦い、大敗す。宗麟、四十九歳。

天正十四年（一五八六）十月、島津軍が豊後に侵入する。

天正十五年（一五八七）

五月、大友宗麟が津久見にて死去する。享年五十八歳。

同年六月

播磨（現兵庫県）の黒田官兵衛孝高が豊臣秀吉から豊前六郡を宛がわれる。孝高は福岡県行橋市南部の馬ヶ岳城に居をかまえる。

天正十八年（一五九〇）頃

黒田孝高が豊前中津城（現中津市）を築城する。

文祿元年（一五九二）

三月、秀吉の命により、大友吉統（義統、秀吉の一字をもらって改名）らが朝鮮に出陣する。

文祿二年（一五九三）

五月、大友吉統が敵前逃亡の罪により、豊後国は没

収され、吉統は毛利輝元(二元就の孫)に預けられる。
吉統三十六歳。

同年九月、吉統は水戸(現茨城県)の佐竹義宣に預けられる。秀吉は豊後を細分して、部下に与える。

文祿三年(一五九四)

二月、秀吉は豊後を再び分割して、部下に与えた。

竹中重利に豊後高田一万五千石、熊谷直陳に安岐一万五千石(安岐町)を与える。

慶長元年(一五九六)

閏七月、豊後に大地震があり、沖ノ浜(瓜生島)が海中に没る。

慶長二年(一五九七)

太田一吉(和義、政之)が豊後臼杵に封ぜられる。

また、臼杵城主福原直高を豊後府内(現大分市)十二万石に封じる。直高は豊後府内城の築城にかかる。

慶長三年(一五九八)

八月、豊臣秀吉が死去する。享年六十八歳。

慶長四年(一五九九)

十一月、大友義統(吉統)が許される。義統四十二歳。

同年秋、徳川家康が細川忠興(細川幽斎藤孝の嫡子)に豊後の速見・国東郡六万石を与える。忠興は松井康之・有吉立行を木付城代(現杵築市)とする。

慶長五年(一六〇〇)

九月、大友義統(吉統)が周防(現山口県)の大畠に下る。

九月九日に義統が豊後別府浜脇に上陸する。同日、中津城の黒田如水孝高軍が豊後へ向けて進発する。

九月十三日、石垣原合戦が行われる。翌日、大友義統(吉統)が黒田如水孝高に降伏する。如水五十五歳、吉統四十三歳。

九月十五日、濃州関ヶ原(岐阜県西部)の合戦が行われ、西軍石田三成が東軍徳川家康に破れる。家康五十九歳。

九月十八日、黒田如水孝高が熊谷氏の安岐城、垣見氏の国東富来城を攻め落とす。

九月二十八日、豊後岡城主(現竹田市)中川秀成(ひでしげ)が臼杵城主太田一吉を攻め降す。

十一月、徳川家康が豊前中津城主黒田長政(如水孝高の嫡子)を筑前(現福岡市)五十二万石に、細川

忠興を豊前（小倉、現北九州市）三十五万九千石に封じる。忠興の三男忠利が中津城代となる。

この冬、稲葉貞通が臼杵五万石に封ぜられ、翌年入部する。

慶長九年（一六〇四）

三月、黒田如水孝高が死去する。享年五十九歳。

慶長十年（一六〇五）

七月十九日、大友吉統（義統）が常陸六戸（一説には江戸牛込）で死去する。享年四十八歳。

慶長十七年（一六一二）

七月、大友義統の嫡子義乗が死去する。享年三十六歳。

元和元年（一六一五）

五月、豊臣秀頼（秀吉の子）が大坂城で母淀殿とともに自殺する（大阪夏の陣）。秀頼、享年二十三歳。

元和二年（一六一六）

四月、徳川家康が死去する。享年七十五歳。

寛永九年（一六三二）

六月、幕府が、熊本藩主加藤忠広（清正の子）を出羽庄内（現山形県）に配流し、十月、細川忠利（忠

興の子）を小倉から熊本に移す。細川忠利が熊本五十四万石を領し、子孫は外様雄藩の藩主として明治に至る。福岡の黒田氏も明治まで存続する。

参考引用資料

「大分県の歴史」

渡辺澄夫著

昭和六十二年

山川出版社

「大分の歴史年表」

渡辺澄夫編

昭和五十九年

大分合同新聞社

「日本史年表」

昭和六十二年

東京学芸大学